

國學院大學學術情報リポジトリ

段玉裁における「」について：
挙げられた凡例を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大橋, 由美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000903

段玉裁における𠄎について

——挙げられた凡例を中心に——

大橋由美

1. はじめに

本稿では、『説文解字注』（段注と略す）で後漢許慎の『説文解字』（説文と略す）の説解に某𠄎とあり3篇上言部ではなく司部に属す9篇上29葉b𠄎^{ウラ}「意内而言外」（A）について論じる¹⁾。主として段玉裁が𠄎とは凡例²⁾であると断じ詳細に説くのに挙げた例を手掛かりに、氏における𠄎説の基本を知り執筆態度の一面を考える。

一般に意味を有するコトバ（音声言語）を声で伝えれば意思伝達は可能である。しかし、見えないモノをコトバとして口にしても、それを如何にして可視化しコトバの意味を伝えるモジとしたのか。人の喜怒哀楽はもとより、見えぬ疫禍に在り先行き見通せないままに居るに等しい恐怖など、人類の誰にとっても困苦甚だしきモノだ。心に抱く思いを表明し且つ記録化してこそ人類の英知もまた時空を超えろとは、中国の古典が教えるところである。一方、本来有する意味を読まない所謂置き字などを含む助字は、何らかの語気を表わし様々な用法があり複数の文字が用法も同じ場合の多いことも周知のことである。

説文の15篇の𠄎（上1a）は、倉頡創字の伝説から始まる。鳥獸の足跡をとくと観察し自ずから定まる理^{オジ}がある事を知り、それに象^{モン}つて文（原初的で単体のモジ）を創り、その後、この文と文とが合体して字^ジ（滋生した二次的モジ）ができた、と記す。許慎はこうして揃った当時ある9,353字を各説解で六書説を以て解説する。清の段玉裁は、この六書説を、モジの造字四つ（文は指事と象形の二つ、字は形聲と會意の二つ）とできた文字の用法二つ（轉注と假借）とを合わせた文字の構成と用法に関する総合的概念として説き、各字の構成もその六書説を駆使して段注一書を為した。また、段氏は、許慎が𠄎（下1b）に記した著述の体例で部首の基本について、同

類の文字だけを聚め條すじを同じくして続け一貫した理でまとめるのが一つの部首で、形の系聯により「一」から「亥」、さらに「一」へもどると循環するように配された凡540部はこの世界の全てで、あげないものはない、という。概して同一部首内は近い位置にあれば互いに義も近く、部首は互いに形が似る（ので義も近い場合がある）ことが理解できる。³⁾つまり、主として部首である文に後に文を加え字ができるから、編集の体例によって、この部首で意味(伝えたいこと)の大まかなカテゴリーが分かり、出来上がった字でその詳細な意味・モジが伝えたい意図が分かる。内包する意味の精粗がモジ構造の2段階によって表される。

また、書の段注では「書とは、「意内而言外。从司言」だから、此こでは物の状さま及び發聲や助語を摹繪する（その様に倣い描く）文字を謂うのである（いみする）。」(B)と段氏助字説に言及する。助字は多彩で多く本稿の対象はわずかで全貌を論じることは到底不可能であるが、以後の段氏助詞説の基本として、段注一書で最も要領を得、広範に論じると考える。

2. 凡例としての書

書の説解は、主として本義を説く⊖と文字の成り立ちを説く⊖から成る。

⊖意オモイが内側にあるのでそれで言・音声言語が外にあるのである。⊖司と言に従う（言に出していうこと・音声言語を主とみなしてつかう）。」

文字の本義を説く⊖の段注は以下のように始まる。

⊖「確かに内において意（オモウコト・キモチ）があれば、それに因って確かに外において言う（口に出す）ことがある、これ（その口に出すコトバ）を書と謂う（書のいみである）。此の語は全書の凡例と爲る。…

⊖で文字の構造と字体を説く。(C) 説文の代表とされる宋代の所謂大徐本（徐鉉『説文解字』）に見える字体の詞を全て書に改めた理由も以下のように記す。六朝の陸機が修辞や詩法を論じた「文賦」と北宋の書家として名高い郭忠恕が六藝に関する古今の書體を論じた『佩觿』、及び元・李文仲の『字鑿』（四庫全書・經部小学類字書之屬）を引き、本来創造時には創造者の意図に因る字形であることを歴史上分野を異にし主張した人たち

の説を合わせて根拠とする。モジの字体と字義の重要性和関連性の深さを、字音（特に古音説）の研究から始めた段氏が総合的に述べる。（* は筆者補注）

㊦司とは、主^シである。意は内において主となり言は外で發せられる。故に司と言に从う（構成要素してもつ、つまり「言を主とする」）。

陸機は賦（文賦）で「辭呈材（*原文は才）以效伎、意司契而爲匠（辭は才能を呈^{あらわ}しそれで以て伎を效^{わざ}し証明し、意は契^{もじ}を司としてそうして匠と爲る）」という。此の字（𠄎）が司を上にし言を下にすることについては、内外の意（内が意つまり司で、外が言）であるからである。

郭忠恕は『佩觿』で「詞朗之字、是謂隸行。本作𠄎𠄎（詞朗の字は、是れは隸書が通行していることを謂い、本来は𠄎𠄎に作る）」といい、李文仲は『字鑿』で「詞朗崩秋字、說文作𠄎𠄎𠄎𠄎（詞朗崩秋の字は、說文では𠄎𠄎𠄎𠄎に作る）」という。是れらは古くは本来は詞に作らず、今は（大徐小徐）各おのの本^{テキスト}は篆文は詞に作るのが、誤りであることを証拠立てることができる。似茲切（ジと發音）。一部。

とまず述べる。六書説で文字の構造成立を正し字形を整えたのち、各字（𠄎）の段注が音・義、更に他の関連する文字の多方面から論じられるのは常套である。この後、重要な二つの鍵となる術語の「意」と「𠄎」に着目して、𠄎とはいかなるものかを説き進めてゆく。

2-1. 𠄎中で段氏が引く「意」の4例（No.1~4）

まず「意」類について、こう述べる。（D）

全書で「意」と言うのがあることについては、例えば𠄎の「言意（口に出すという意）」、𠄎の「無腸意（心がない（恥知らず）という意）」、𠄎の「悲意（ちょっと怖いという意）（*段注は「悲しむ意」を取らない）」、𠄎の「𠄎意（気が弱いので急き懼れる意）（*段注はやや改める）」のような類が是れである。

引かれた4例（No.1~4）の字音と説解（㊦字義・㊦構造）を示す。

1. 8下23 a 𠄎（𠄎）

㊦意を言^{くち}するである。㊦欠に从^{したが}い𠄎に从う。㊦𠄎はまた同時に聲^{はつおん}をあらわす。酉^{ユウ}の若^ように讀む。

- ㊦ 言する対象である意があるのであり、「意内言外」の「意」だ。
- ㊧ 𩇛は、氣が行く兒。
- ㊨ 與久切（ユウと発音する）。三部。

2. 8下25a 𩇛 (𩇛)

㊦ 咄𩇛は、㊦ 慙ることが無い。一いは腸が無い意という。㊧ 欠に从い出がその聲。𩇛 (丑列切・15部・テツ) の若うに讀む。

- ㊦ 逗る。此こは疊韻 (*ともに入聲として合う)、古語である。
- ㊦ 「無腸」は猶ど「無心」のようである。按えるに『廣韻』(6入術韻)に「訶也(しかる)」というが、蓋ん咄 (*説文は「相謂也」だが李善引説文には「呵也(しかる)」とあるのでいう。11没韻・當没切。15部)に同じと謂うのだろう(意味だろう)。
- ㊨ 丑律切(チュツと発音する)。五部。

3. 8下23b 𩇛 (𩇛)

㊦ 悲意(悲しむ意)。㊦ 欠に从い𩇛がその聲。

㊦ 「意内言外」の意だ。玄應書(『一切経音義』9)が『通俗文』は「小怖曰𩇛(小怖れることは𩇛という)」、『(春秋)公羊傳』(哀公26年春)は「𩇛然而駭(𩇛然として駭ろく)」というのが、是れである。按えるに今『公羊』では「色然(驚きや怒りで顔色を変えるさま)」に作る。

㊦ 所力切(ショクと発音する)。一部。諸書を合せて攷れば、本𩇛の下(説解)では當然「小怖也。从欠𩇛聲(小怖い)」とい、『公羊傳』「𩇛然而駭」を引くべきだ。さらに又た𩇛篆を出し、下(説解)で當然「悲意。从欠𩇛聲」というべきだ(*𩇛を欠部末に段注は補わない)。しかしそうはなっていないので今の本は舛奪(誤り脱す)している。故に『廣韻』(去聲36嘯)、『集韻』(36嘯)が仍として𩇛では「悲意」と注し「火弔切(キョウ)」とする(*今見るのは𩇛弔切に作る)のは非で、『類篇』(8下)が𩇛は「𩇛叫切(キョウ)、悲意」と注するのは是である。

4. 8上26b 儼 (儼)

⊙意驕也(意が驕い)。⊙人に从い然がその聲。

⊖(10下24b)意については、「志也(意をかたくする)」で(*意と志は説文で隣り合っており所謂轉注)、(4下38a)驕については、「奕易破也(奕くて破れ易い)」であるから、「意驕」は此の意はあるがしかし堅固でないことをいう(意味する)。『玉篇』(23人部)が「意急而懼(意が急いて懼れる)」というのは蓋ん説文の語を説いたのであり、或いは當然「驕意(驕い意)」に作るというべきであろう。

○『通俗文』(*『一切経音義』5が引く)は「痛聲曰瘃。警聲曰儼。儼于簡切(痛くてあげる聲は瘃といい、警いてあげる聲は儼という。儼は于簡切(エンと発音)」という。

⊖人善切(ゼンと発音)。十四部。

以上から、例の挙げ方が、段注の篇葉順ではなく、また人部1例を最後におく以外は3例全て欠部(⊖「張口气悟也」⊖悟、覺也。引伸爲解散之意(⊖「口を不自然に大きく張れば気が悟する」⊖悟は「覺る」である。引伸して解散の意だ))に属す。⁴⁾また経韻樓原刊本ででは同じ欠部で葉も版心を挟むだけの1と3を分離して説く。言葉を口に出させるに至る心にある思い「意」は様々にあるが厳選したに相違なく、偏った印象さえも与えかねない。繰り返す「意内而言外」は、これらの文字が「意(あるいは心、志)」という鍵詞で書に関わるからだが、やや穿った見方を取えてすれば、No.1~3を続ければ、意を言う→慙ることが無い(或いは心にかけず知らない)→悲しい思い、でNo.4は意志が弱い(人)、と繋がろうか。最後はその張口で気分を解き覚醒する人かもしれないなら、この配列から先ず意を口に出すこと、つまり欠を段氏は重視すると思える。

2-2. 段氏が引く「書」の17例 (No. 5~21)

「意」を説いた後の段注⊖で続けて以下のように書の例を挙げる。(E)

書と言うのがあることについては、如えば、𠄎「詮書也(つまびらかにして釈いていう書である)」、𠄎「事別書也(事を別けていう書である)」、𠄎「俱書也(俱にするという書である)」、𠄎「書也(*これを非として訂し誰(ヒトやモノなどを尋ねる)書とする)」、𠄎「鈍書也(鈍いという書である)」、𠄎「識書也(識るという書である)」、曾「書之舒也(書

が舒びゆくさまである)」、乃「詈之難也(詈が難しいさまである)」、余「詈之必然也(詈が必ずそのようである)」、矣「語已詈也(語し已る詈である)」、矣「兄詈也(兄す詈である)」、匆「驚詈也(驚ろくときの詈である)」、既「弟惡驚詈也(悪いものに弟い驚くときの詈である)」、臙「弟鬼警詈也(鬼に弟い警く詈である)」、泉「衆與詈也(衆くのものとの與(かかわりあう)という詈である)」のような類が是れである。

2-2-1. 段氏が引く「詈」の15例 (No. 5~19)

上記詈の例中、4上16 a 曉で再度繰り返すものと新たに加えたものがあり、新たに加えたものは分けて後に1-2-2で挙げる(一括分も番号は併せて通す)。

5. 8下25 b 吹(嗽)

㊦ 詮詈(つぶさに説く詈)である。㊦ 欠と日に从う(口にだして曰う、会意)。㊦ 日は亦た同時に聲。㊦ 『詩』(大雅・文王有聲)に「吹求厥寧(厥ら(民)の安寧を希求し吹る)」(*十三經本「逋求厥寧」という)。

㊦ 詮は「具也(つぶさにする)」である。『淮南(子)』『詮言訓』で高(誘)は注して「詮、就也。就萬物之指以言其微。事之所謂。道之所依也(詮は就(つく)である。萬物の指ししめすところに就きたがいそれで以て其の微を言う。事の謂する所は、道の依拠するところである)」という。(つまり)「詮詈」とは、凡そ詮解(つぶさに解く)してそれを以って詈とする。如えば「吹求厥寧」は、吹いて中和が庶幾と爲るようなのが、是れである。(['爾雅』)「釋言」で「適、述也(適は述である)」といい、(['詩經』)「毛詩(唐風)」「蟋蟀」の傳で「聿、遂也(聿は遂である)」といい、「文王(有聲)」の傳で「聿、述也(聿は述である)」というが、古くは聿と適は同字で、述と遂は同字だった(からだ)。『爾雅』では述を言いながら而して遂が其の中に在る。毛公は或いは遂と言ひ、或いは述と言ったりして、(それに)因り文(ことば)を分別している。毛詩では多くの場合聿と言ひ、獨だ「文王有聲」だけ適と四回言うが而し毛(詩)は傳がない。毛(公)の意は適は他でもなく即り聿で、聿は遂と訓むからで、故に鄭箋は述をば以ってこのことを別け

なのだ。^{スイ}遂とは、因事の詞*彣（ある事に因んでいう）であり、亦た同時に專書（その意味・ことだけに専ら用いる書）だ。（*文選「江賦」注が引く）韓詩及び曹大家は「幽通賦」に注し及び杜（預）は『左傳』（昭公26年）に注して皆て「聿、惟也（聿は惟である）」というが、此れは專書である。𠄎は其の正字で、聿（所呂書也）、適（回辟也）、曰（書也）は皆て其の假借字（段氏全て15部）である。因書と專書は皆に詮書である。

㊦會意だ。気が悟か^{あきら}となって（であって）而して書を出すのである。

㊧余律切（イツと発音する）。十五部。

㊨今は「大雅」では𠄎は適に作り、班固の「幽通賦」「𠄎中𠄎爲庶幾兮（中𠄎は庶幾と為るのだ兮と𠄎う）」は『文選』では（𠄎は）聿に作り、『詩』は（大雅・抑）「曰喪厥國（^{かれ}厥らの國を喪うと曰う）」、（小雅・角弓）「見暘日消…見暘日流…（^{ひがさ}暘すの^{あらわ}が見れるのは消と曰い…^{ひがかげる}暘の^{ひがかげる}が見れるのは流と曰い*訳不十分）」で、（曰は）韓詩は皆て聿に作る。

* 3下21b 聿（余聿切 15）・2下3b 述（食聿切 15）・2下10a 遂（徐醉切、15）5上28a 曰（王伐切 15）10下30b 惟（凡思也。以追切、15）

6. 4上16a 者（𠄎）

㊦別事書である（事を別け明確にする書）。㊦白（鼻）に从い^{リョ}𠄎がその聲。⁵⁾

㊦言うことが別事を主（意とする）とすれば、その時は則^{つま}り者と云って（それで）以って別ける。（『儀禮』）「喪服經」「斬衰裳、苴經杖、絞帶、冠繩纓、菅屨者（喪で最も重い斬衰の服装は、下は切ったままで縁取りしない裳、^{なわ}苴（履物の中敷きを作る）の^{おび たけのつえ}經に杖、帯を絞め、冠には繩の纓、^{みずくさ}菅で編んだ^{くつ}屨（ということについて）は）」で、（鄭玄）は注して「者者、明爲下出也（者とは、明らかに^{ため}爲に^{いか}下に出すのである）」といい、此が別事の例だ。凡そ俗語で者箇、者般、者回というのは皆て別事の意を取る。何時^{いつ}に迎^{むか}この^{これ}這^{このたぐい}の^{こんかい}這をば以てこれに代えたか知らない。這は、魚戰切（ゲン）だ。

㊦𠄎は古文の旅だ。𠄎部（7上21b 旅）に「𠄎古文旅（𠄎は古文の旅）」という。者の偏旁はというと乃りは全く類ではない。轉寫の過りである。之也切（シャ）。古音は五部に在り^{シヤ}𠄎のように讀む。

7. 4上15b 皆 (𠄎)

㊦俱𠄎(俱にするという𠄎)である。㊦比(人がならぶ)に从い白(鼻)に从う。

㊦司部に𠄎とは「意内而言外也」という。其の意が俱^{ともにする}と爲れば、其の言(ことば・音声言語)は皆と爲る。言をば以って意を表わす、是れが「意内言外」と謂う。人部(8上15b)俱(舉朱切・古音在4部)の下(説解)に「皆也」というが、是れが轉注(*互訓で戴震先生得意独得の説)と謂う。さらに又た(同15b隣り合う)偕(古諧切・15部)下(説解)で「一曰俱也(或いは俱である)」というの、則り音(偕と皆は古諧切・15部)と義が皆て同じだからだ。

㊦比に从う(比を構成成分としてもち)會意。古諧切(カイ)。十五部

8. 4上16a 𠄎 (𠄎)

㊦𠄎である。㊦白(鼻)に从い𠄎^{チュウ}がその聲。𠄎^{チュウ}と𠄎とは同じ。㊦虞書にいう㊦「帝曰𠄎咨」と。

㊦凡そ毛傳の例では(𠄎ではなく)「辭也」という。如え(た)ば(国風・周南)「芣苢」の「薄」や「漢廣」の「思」、(国風・召南)「草蟲」の「止」、(国風・鄘)「載馳」の「載」、(国風・鄭)「大叔于田」の「忌」、(国風・鄭)「山有扶蘇」の「且」は、皆て是れだ。

説文の例で「某𠄎」というのは、白(鼻)部を外せば、(8下欠部)𠄎は「詮𠄎」と為し、(5下矢部)𠄎は「語巳𠄎」と為し、(5下矢部)𠄎(*𠄎)は「況𠄎」と為し、(5上日部)𠄎は「出气𠄎」と為し、(2上口部)各は「異𠄎」と為し、(5上兮部)𠄎は「驚𠄎」と為し、(2上八部)余は「𠄎之必然也」、(2上八)曾は「𠄎之舒也」が、皆て是れだ。然うであれば則ち「𠄎也」の二字は例でない(例外でもない)。當然「誰𠄎也(疑問の𠄎である)」の三字に作るべきである。

「堯典」で「𠄎若予(𠄎か予の若な人物)」と言うことは二回で皆に「誰」と訓む。則り「𠄎咨若」と二回言っても同様で亦た必ず同じだ。「𠄎咨」は當然咨が先で𠄎が後(咨𠄎)だ。語うのが急^いので故に^{せわしない}余^{このよう}だ。

壁中古文字は𠄎に作り古字であるが、『爾雅』(釋詁)は「𠄎、孰、誰也(𠄎、孰は誰である)」で字は𠄎に作り今字である。許(慎)は𠄎(13下42b ㊦耕治之田也。直由切。3部。隸作𠄎)をば以って假借字と爲、

鬮は正字と爲る。故に口部で鬮が「誰也」というのは、則りさらに又た鬮と疇は古今字と爲るからだ。説文の例では（親字の）篆文（小篆）に敘るに古文・籀文（の順）を以て合せる。鬮とは古文で小篆ではないのである。何にそれでもって此に廁ぜるのか。凡そ『書』、『禮』では古文は往往にして其の部に依り居いて録しのこされる。必ずしも皆てが小篆を先にし古文を後にするわけではない。同様に亦た必ずしも上（1上2b二）部の例の如うではなく、古文を先にすれば必ず系ぐのに小篆を以ってする。經を尊ぶ所以である。『尚書』が疇に作り鬮に作らないことについては、蓋ん孔安國が今文字をば以ってこれを讀み、『易』が『爾雅』に同じだからであるからであろう。

㊦直由切（チュウ）。三部。

㊦虞書は當然に唐書に作るべきである。日の子は今補う。

9. 4上15 a 魯（魯）

㊦鈍魯（鈍いという（意をいう）魯）である。㊦白（鼻）に从い魚がその聲。

㊦孔（安國）は『論語』（先進11「參也魯」）に注して「魯、鈍也（魯は鈍いである）（*「參也魯」注「孔曰魯鈍也。曾子性遲鈍」疏：曾子性遲鈍。皇本無性字、鈍下有也字。案釋文明出鈍也、是陸氏所據本亦有也字）」といい、『左傳』（文公15年）の「魯人以爲敏（魯人は敏と以爲う）」は鈍い人を謂い（意味し）、（『爾雅』）「釋名」では「魯、魯鈍也。國多山水。民性樸鈍（魯は魯鈍である。（その魯の）國には山水が多く、民の性が樸鈍だからだ）」という。按えるに椎魯（愚鈍）、鹵莽（塩分を含んだ荒地、輕率で粗略）は皆にほかでもなく即り此れ（魯）だ。

㊦（大小徐）各本は「鯨省聲（鯨の省略形がその聲）」に作る。按えるに鯨は差の省略形の発音に从う（11下27 a「从魚。鯨省聲。側下切（サ）。十七部。俗作鯨。」）であるが古音は（5部・魚模韻ではなく）十七部に在り、今の歌麻韻だ。魯字は古音と今音は皆に五部に在る。魯・櫓の字では用いて鯨聲（符）と爲る。古文では旅を以って魯と爲る。（そうであれば）則り鯨は淺人の爲めに妄りに改められたのであるから、今正す。郎古切（ロ）。五部。『論語』は「參也、魯（參よ、魯だね）」で、「先進篇」の文だ。（*1下18 b 魯「㊦艸也。可呂束。㊦从艸魯聲」、6上54

a 櫓「㊦大盾也。㊦從木魯聲」で段氏反切は共に郎古切。五部。さらにこの2字には或体「或从鹵」があり段注は共に「鹵聲（郎古切。五部）」。

10. 4上16b 𠄎 (𠄎)

㊦識しるという（意をいう）𠄎である。㊦白・𠄎・知はな（白と𠄎（気が舒びゆく）と知る）に従う（白から気がきわまりなく舒びでて知る）。

㊦此と矢部の5下25 a 知（*「㊦（識）𠄎也。㊦从口矢（陟离切チ・16部）」とは音・義が皆に同じだ。故に二字は多く通用する。

㊦（小徐）𠄎は「𠄎亦気也（𠄎も亦た同様にいき気である（*『説文解字繫傳』：必有言、故文白知爲𠄎。白者、詞之氣也。𠄎亦氣也、知不窮、氣亦不窮也。（必ず言ことばが有るので、故に文は白と知で𠄎と爲る。白ということについては、詞の氣である。𠄎も同じく亦た氣である。窮らないならば、氣も亦た窮らないと知るのである。））」という。按えるに知にち従い會意で、知は亦た同時にその聲だ。知義切（チ）。十六部。

11. 2上2a 曾 (曾)

㊦𠄎が舒びるのである。㊦八（気が分かれる）に従い日エツ（いう）に従う。

㊦𠄎はその聲。

㊦日部に「替、曾也（替シン（かんざし）は、曾である）」という。『詩』（大雅・生民・民勞）「替（*𠄎）不畏明（替すな（*𠄎）わちつまりは明らかなることを畏れぬ）」、（小雅・節南山・十月之交）「胡替（*𠄎）莫懲なげ（胡に替つまり（*𠄎）は懲なげることがないのか）」で毛（亨）、鄭（玄）は皆に「替、曾也」という。按えるに曾は（発音と意味を一語でいえば）乃ダイ（𠄎之舒也）である。『詩』（小雅・節南山・正月）「曾是不意（曾わちつまりは是に意わない）」、（大雅・蕩二章）「（曾是彊禦、曾是掎克）曾是在位、曾是在服（曾りは是に彊く禦ぎ、曾りは是に掎て克つ）曾りは是に位に在り、曾りは是に服（ことにじゅうじ）する（立場）に在る」、（蕩七章）「曾是莫聽（、大命以傾、文王曰咨、咨女殷商）曾りは是に聽くことなく（、大命はそれで以て傾いた、）・・・」、『論語』（為政2）「曾是以爲孝乎（*正義：曾猶則也）（曾りは是にそれをば以て孝行をしていると為しようか、することはできない）」、（八佾3）「曾謂泰山不如林放乎（曾ちつまりは泰山が林放到如ばぬとでも謂う意味なのか（*正義：曾之言則也）」、『孟子』（公

孫丑上・管仲や晏子の道は取るに足らず「爾何曾比予於管仲（爾は何曾りは予曾西を管仲に比べるか）」は、皆て（曾を）訓んで乃と爲ればその時は則り語氣が合う。趙（漢・趙岐）は『孟子』（公孫丑）に注して「何曾猶何乃也（何曾は猶うど何乃である）」というのが、是である（正しい）。是に替をば以って訓んで曾と爲れば「替不畏明」ということについては、「乃不畏明也」だ。皇侃は『論語（義）疏』（為政2）で「曾猶嘗也。（曾は猶シヨウ嘗のようである）。」というから、「嘗て是以て孝と爲すか」で、絶えて語氣ではない。

蓋ん曾の字は古くは乃と訓み子登切（ソウ・反切上字の子は精母、齒頭音、全清）で、後世は用いて曾經の義と爲、才登切（ソウ・才は從母、齒頭音・全濁）と讀んだ。此では今義で今音で、古義で古音ではない。如えば曾祖、曾孫のようにならざるに至り、増益・層意を取ったので、この場合は則り曾・層は皆に讀むことができるようになってしまったのである。

㊦八に従うについては、亦じく氣が分散すること（さま）に象る。

㊦四については、𠂔（10下1a 楚江切。古音在9部）の古文で、𠂔は九部に在るので此では合韻（6部と9部）の理である。昨稜切（ソウ・從母）。六部。昨は當然作（精母）に爲るべきだ。

12. 5上29b乃（ㄋ）

㊦𠂔を曳くのが難しい。㊦氣の出難いさまに象るのである。㊦凡そ𠂔の屬は皆て𠂔に従う。

㊦『玉篇』（93乃部）では𠂔は離に作り、非である。上には當然者の字が有るべきで（曳𠂔之難者也）、曳いて矯拂ことが有るという意で、其の言を曳き而して轉じるのだ。若而、若乃は皆に是れであるが、乃の場合は則り其の曳くのが難しいモノ（者=𠂔）なのである。『春秋（左傳）』で「宣（公）八年」の「日中而克葬（日が中すれば葬るに克えない）」、「定（公）十五年」の「日下昃乃克葬（日が下つて（西に）戻ればその場合はやと乃り葬るに克える）」は、『公羊傳』では「而者何。難也。乃者何。難也。曷爲或言而、或言乃。乃難乎而也（而とは何だ。難しいである。乃とは何だ。難しいである。曷に或いは而と言い、或いは乃と言ったりするか。乃は而より難しいからである）」といい、何（休）は「言乃

者内而深。言而者外而浅（乃とすることについては内面的で深い。而とすることについては表面的で浅い）」と注する。按えるに乃（泥母 海韻 上聲 乃小韻 奴亥切 一等 開口）、然（日母 仙韻 平聲 然小韻 如延切 三等 開口）、而（日母 之韻 平聲 而小韻 如之切 三等 開口）、汝（日母 語韻 上聲 汝小韻 人渚切 三等 合口）、若（日母 藥韻 入聲 若小韻 而灼切 三等 開口）は一語の轉（2人称代詞）であるから、故に乃はさらにまた汝（人渚切、5部）と訓むのである。

㊦ 氣が出るが直に遂むことができない。象形。奴亥切（ナイ）。一部。

13. 2上1b 尔（尔）

㊦ 𠄎で必ず然であるということ（意）である。㊦ | と八に从い（真っ直ぐに広がる）、八は氣の分散するさまに象る。㊦ 𠄎がその聲。

㊦ 𠄎は今は詞に作るが、説文では字體は本来は𠄎に作る。尔の言たる（尔の発音と意味を一語でいえば）例えば此（これ）のようである。後世には多く爾字をば以てこれと爲るので、凡そ果爾（果してまことにこのようだ）、不爾（そのようではない）、云爾（とこれだけいうだけだ）、莞爾（微笑するさま）、鏗爾（金石玉木などでできた楽器が出す大きく清み明るい音の形容）、卓爾（ひとり抜きんでて高く高く真っ直ぐに立つさま）、（『禮記』「檀弓」喪事）「鼎鼎爾（則小人）（ゆったりのろのろするさま（はつまらない人）、（君子蓋（君子は多分に））猶猶爾（凶時で促くすべきであれ節度あるゆったりさであろう））、（『晉書』「阮籍傳・兒子阮咸」）「（未能免俗、）聊復爾耳（（まだ俗を免れえないとしても）かりそめにしばらく再たこうであるだけだ）」、（『文選』「古詩十九首」其十八無名氏・夫婦の変わらない心「客從遠方來詩」）「故人心尙爾（故人の心は尙お爾だ（変わっていない）」）というのは、皆て「如此（このようだ）」と訓む。同じく亦た單獨で此と訓むものがあることについては、如えば『公羊（隱公2年春）』「焉爾之爲於此（焉爾は於此と爲る）」、『孟子』（盡心下篇章末）「（近聖人之居、若此其甚也。）然而無乎爾、則亦有乎爾（（聖人孔子の居所からちかいの、此のようであること其れが甚しいのである。）然であるのに爾であることはない、則り亦た同様に爾であることがあるのだ）（*校勘記「然而無有乎爾則亦無有乎爾」：音義・陸本作「然而無乎爾」則「亦有乎爾」）」のようなのが是れである。

語助で耳に用いるものがあることについては、爾とは絶えて殊なる。『三國志（魏氏志・崔琰傳：公明正大で誠実な人柄）』に「生女耳（女を生むのみ）」（*太祖怒曰：『諺言「生女耳」、「耳」非佳語…』）というのが是れであり、耳の言たるは「而已（而して已む、ノミ）」である。近人は爾と耳は分けず、例えば『論語』（雍也6）「女得人焉爾乎（女人を得たるか、おまえは誰か人を見つけたか）」（*注：孔曰焉耳乎皆辭。校勘記：蓋焉爾者猶於此也。如書作耳則義不可通矣。）は、『唐石經（開成石經・唐石經攷異（錢大昕撰））』は譌って「焉耳」と爲、『詩』「陳風（墓門）」の箋「梅之樹善惡自爾（梅の樹は善惡は自からだけのこと）」は、宋本は譌って「善惡自耳」と爲るようなのが、皆て是れである。（*校勘記：「善惡自有。」閩本・明監本・毛本同。小字本・相臺本有作耳。案有字誤也。正義云此梅善惡自耳可證。但與下此性善惡自然為對文。依義當作爾、考文古本作爾、一本作耳、二字混也）

古書では尔字は、淺人は多く改めて爾と爲す。例えば『説文』の手部（12上）では、51b 擗（「㊦擗頭也（頭を撞く）。㊦从手。堅聲。讀若『論語』「鏗尔舍琴而作」）で『論語』（先進11）の「鏗尔（瑟を下に置くときのおと）」（*校勘記：「鏗尔」玉篇手部擗下引論語、擗爾捨瑟而作云與鏗同）、12上21b 擗（「㊦人臂兒。㊦从手削聲。㊦『周禮』曰「輻欲其擗尔。」）では（『周禮』冬官）「考工記（輪人）」「擗尔（細くそげるさま）」（*望其輻、欲其擗尔而織也（其の輻を望めば、其の細くそげてそして織かであって欲しい）（*校勘記：「欲其擗尔而織也」唐石經・諸本同。宋本脱也字。説文擗人臂貌从手削聲。周禮曰輻欲其擗尔）」を引くが、小徐本（『繫傳』）は誤らないようなのが、是れである（*大徐本はともに爾に作る）。

㊦丨と八に从うのは、小と同じだが異なる（2上1a物之微也。从八丨見而八分之（万物が微かである。八に从い丨は見れたらそれをそのまますぐに八分る）。

㊦今本（大徐本）では此の二字はない。上文は「从入丨八」に作り、此は『（古今）韻會（舉要）』（4紙）が引く小徐本に依って訂正する。入聲は七部に在り、而・尔は十一部と十六部の間に在ることについては、雙聲に於いて（合韻となり通じる・一聲の転）を求めたのである。兒氏切（ジ）。

14. 5下25 a 矣 (曷)

㊦語が已むという書である。㊦矢に从い¹呂がその聲。

㊦已と矣は疊韻(祥里切・一部、于已切・一部、同部疊韻)だ。已は「止也(止む)」である。其の意が止なら、其の言は矣だ。是れが「意内言外」と爲る。『論語』では或いは単独で矣と言ひ、或いは已矣と言う。例えば學而1、子張19兩篇(可謂好學也)では皆に(*學而校勘記漢石經作「可謂好學也矣」、皇本)「可謂好學也已矣」といひ、公冶長5(不可得而聞也)では「(*校勘記:皇本・高麗本也下有「已矣」二字)不可得而聞也已矣」、「(子曰)已矣乎、吾未見能見其過、而內自訟者也」というようである。俗本が句末では矣を刪ることは、非(正しくない)だ。(*公冶長の正義では、「此章疾時人有過莫能自責也。訟猶責也。已終也。吾未見有人能、自見其已過、而內自責者也。言將終不復見故云已矣乎」といふ。これよりすれば、その感情・意が強いならば削除は非の意で、段氏のこの理解に拠る4例は全てそう考えられよう。)(『淮南書(淮南子、あるいは淮南鴻烈)』(説林訓)では矣と也の二字は同じではない(諾之與已也、之與矣、相去千里、…)と説く。

㊦于已切。一部。

15. 5下24 b 弇 (澁)

㊦況書(況書)である。㊦矢に从い^引の省略形がその聲。㊦矢に从うのは、書の之^のくさまが矢の如であることに取るからである。

㊦(大小徐)各本は況の下に「有」があるが、誤なので、今刪る。況は當然兄(8下9 a)に作るべきだ。古と今では音が殊り、ともかくも(いづれにせよ)乃りは或いは況を假りるが、許書では當然本来の兄に作るべきである。

兄長(年長の男性という場合)の兄は引伸して兄^{ます}益と爲る。『詩』(小雅・鹿鳴)「常棣」(況也永歎)の傳で「況、滋也(況は滋である)」といひ、(大雅・蕩)「桑柔」(倉兄填兮)の傳では「兄、滋也(兄は滋である)」、「召旻」(職兄斯引)の傳で「兄、茲也(兄は茲である)」という。兄と況は同じではなく、兄をば以って正(正字・正用法)と爲、滋と茲は同じではないが、許(慎)は皆に益と訓む。

「兄書」ということは、増益の書で、其の意は益で、其の言が弇と

いい、是れが「意内言外」と爲り、今俗に云う所の「已如是すでに（已が是れの如うだ）」で況は「又如是これ（さらに又た是の如うだ）」である。『尙書』では多く𠄎字を用い、俗に矧に作る。

㊦式忍切（シン）。十二部。

㊦矢に従う意を説く。今は矧と言ひ、その場合は則り其の𠄎には一度往けば止ることができないことがある（ということである）。

*兄の段注「㊦从儿从口」でこう論じる。

㊦口がいうのは尽きることが無いようなので、故に儿ひとと口をばます以て滋長の意と爲す。今音は許榮切（曉母 平聲 11部）だが、古音は10部に在り荒（1下38b呼光切 曉母 平聲 10部）のように読み、転じて（古は無かった）去聲となり許訪切（曉母 去聲 段氏10部）だ。今人は兄を呼んで況老と爲るが、つまりは古語である。況を用いることについては、古において假借（声母韻母ともに通じる）となるからだ。矧・況は皆に俗字だ。

16. 5上31b 𠄎（𠄎）

㊦驚𠄎（驚く意の𠄎）である。㊦兮ジュンに従い𠄎がその聲。

㊦𠄎は（大小徐）各本は辭に作るが、誤りである⁶⁾。今は『玉篇』（兮部）と『廣韻』（上聲17準・驚詞）に依って正す。其の意は「驚也（驚く）」で、其の言は𠄎である。是れが「意内言外」と爲る。

㊦思允切（ジュン）。十二部。

17. 8下27b 𠄎（𠄎）

㊦𠄎惡驚𠄎（惡でくわに𠄎し驚く意の𠄎）である。㊦𠄎カに従い𠄎がその聲。楚人の名は多𠄎（多𠄎の𠄎）の若うに讀む。

㊦『玉篇』（𠄎部）には惡字はなく、誤る。惡に遇い驚駭おどろく（意）の𠄎は𠄎カという。猶うど鬼を見て驚駭くのが𠄎カ（9上42b）というようである。假借（ともに17部）して禍字（1上16b「㊦害也（そこなう）㊦神不福也。从示𠄎聲（胡果切・17部）」）と爲る。『史記』、『漢書』では多くの場合𠄎を假りて禍と爲るが、𠄎は即りほかでもなく𠄎である。

㊦多部（9上29a 𠄎）に「齊謂多爲𠄎（齊では多と謂う（おおい意）のは𠄎と爲す）」というので、蓋ん齊楚では皆に此の語が有るのである。『史記』陳勝世家では「楚人謂多爲𠄎。故天下傳之（楚人は多と

いう意味の言を謂って夥と爲す。故に天下はこれを傳える)」という。乎果切（カ）。十七部。

18. 9上42b 𪔐（𪔐）

○鬼を見て驚いた時（の意）の𪔐。○鬼に从い難の省略形がその聲。『詩』（小雅・桑扈）の「受福不𪔐（福を受け𪔐たないというその𪔐）」の若うに讀む。

○鬼を見て而して驚駭くと、其の𪔐は𪔐という。𪔐は奈何の合聲（ナ）と爲る。凡そ驚く𪔐が那ということは、ほかならず即り𪔐字だからだ。例えば（『後漢書』逸民列傳・韓康）「公是韓伯休那（公は是さに韓伯休か）」のようなのが是れである。『左傳』（宣公2年）「棄甲則那（甲を棄てるとはつまりなぜだ）」は、同じく亦た是さに奈何の合聲だ。

○（『詩』）「小雅・桑扈」で「受福不那」の傳で「那、多也」という。此は𪔐に作らないのは、字の誤か、或いは是しく三家詩かと疑う。諾何切（ダ）。十七部。

19. 8上45b 𪔑（𪔑）

○衆人が與する意の𪔑である。○𪔑に从い自がその聲。○虞書は（次のように）いう④「𪔑咎繇」。

○「與詞」は（大小徐）各本は誤って倒（眾詞*𪔑與也）である。今『廣韻』（6至）に依って正す。「衆與」ということは、多くが與わることである。與る所が一人ではないのである。詞*𪔑ということについては、「意内言外」の謂だ（意味である）。

或いは泊を假りてこれと爲る。例えば鄭（玄）は詩𪔑（商頌（*正義曰此尚書無逸文也（尚書無逸文））で「爰泊小人（爰小人とみなで泊にする（*爰於泊與也）」と偁うのが是れである。同様に亦た暨を假りてこれと爲す。例えば『公羊傳』（隱公元年）「及者何。與也。會及暨、皆與也。暨猶暨暨也（及ということは何だ？與である。會、及、暨は、皆て與である。暨は猶うど暨暨のようだ）」である。（『爾雅』）「釋詁」は「暨、與也」といい、「釋訓」は「暨、不及也」という。按えるに（「釋訓」）「不及」は「及也」である。即まり『公羊（傳）』の所謂る「猶暨暨也（猶うど暨暨（思い切つてするのようだ）」）である。

㊦其冀切（キ）。按えるに（反切下字）冀（几利切。古音在一部）は當然泊（*11上2・30b其冀切。按當依釋文其器反（按えるに當然（經典）譯文の其器反に抛るべきだ）。十五部。）に作るべきだ。十五部。

㊧虞は當然唐に作るべきで、（この理由について詳細な）説は禾部（7上55a 稭）を見よ。

㊨堯典の文。今書は暨に作る。

（*以下の古文は省略する）

以上、多いと思われる15例は、段氏にとっては凡例に挙げて必要十分と考えるべきである。部首は欠（気・息をめぐらし発散し意識を覚醒させる）、白（呼吸する鼻）、兮（気が揚り分散する）、八（気が出て広がる）、乃（気が行き悩む）、矢（気が真すぐに進む）、兂（息ができなくてつまる）、人の部と続き、欠部を先頭としてやはり篇葉の順ではない。

5𠄎（詮𠄎）→6者（別事𠄎）→7皆（俱𠄎）では、全体を総括するような𠄎から用法として個別固有の働わきを持つ𠄎に及ぶ。5詮𠄎は専門的にその意を言うための𠄎で、他と区別して説く点から6者の意に同じで、続く合切して言う意の7皆は者と対となる。𠄎の段注には別事𠄎や專𠄎、汎𠄎などの術語もあげられ段注に散見すると察せられ、この配列は詮𠄎の具体的な典型を先ず連続させ𠄎の実際の多様さを想像させるようだ。專𠄎と汎𠄎は段注に屢々見える二元論的な考え方に基く術語で鍵となり重要であろう。

その後8𠄎（𠄎）まで「意内而言外」と注する𠄎であることを明確にしつつ、より具体的な例へ導くようだ。上述5→6→7同様説文部首内は意味の関連に因り同義の字が属き最後を一般的にわかりやすい文字でまとめる、或いは対の義の文字を排して区切りを示す配列に似る。特に経書の一にあげられる『爾雅』「釋詁」の劈頭「初、哉、首、基、肇、祖、元、胎、俶、落、権輿、始也」が最後は通字である「始也」でまとめることに同じ同義字の配列にこだわるのは、師である戴震独得自信の轉注説を段氏がとるゆえのことでもあろう。

9魯（鈍𠄎）→10𠄎（識𠄎）は、比較的わかり易い文字魯からそれと対になる意味の知（賢い）の意の𠄎へ続く。11曾（𠄎之舒）→12乃（𠄎之難）→13尔（𠄎之必然）までは、説解の表記形式がやや変わる。相互に同義・近似の義、或いは対の義に用い通じること（すなわち・なんじ・しかり・ち

かい・これ、(殊なると注するが)のみ、など)と、比較的馴染みがある文字、所謂助詞或いは虚詞の類が順繰りに並び続き関連性があるグループであることを教える。語気・語助に言及する。13矣と14矣は限定(句切る)の点ではやや意味が通じるようだが更に表現が変わるので切れるとみなす。14矣(語已𠄎・やむ)→15矣(況𠄎・ます)は、欠部関連の後その反転した𠄎部をおき、𠄎部以前でひと区切りを示すことに同じである。

さらに表現が始めの9のように戻る。16𠄎(驚𠄎)→17𠄎(兇惡驚𠄎)→18𠄎(見鬼驚詞)では、16(驚く)の通語相当からどのような場合に驚くかという文字を続けるが、好ましい義とは思えない。鬼を見た場合は理解できないことから、なぜという疑問詞に説明が及ぶ。

19𠄎(衆人が與する意の𠄎)で終わり、篇葉順ではないことと最後は人部であることも2-1.に同じである。

以上、いくつかの𠄎ごとのまとまりはあるが、行きつ戻りつのものであり定まった意図が見えにくい。全体とした流れが強くなるかはまだ不明とする。ただ、その不安定さが何かの意味をもつのか、と思う。

繰り返される「意内言外」が𠄎の基本と主張されることは疑えない。同じようなことが書かれ、論証上欠かせない同じような証拠というべき文字が異なる𠄎の段注中に取り上げられることも、段説𠄎に繋がると考える。説文は字書ゆえ、どこを、いつ、誰が、なぜ引くかわからないことに対応する配慮といえは当然だが、忍耐強く入念で、その意図を慮る。𠄎の多くは、関連し、それらは音韻学的に同音或いは近似で仮借ある。15矣「況𠄎」は水部の況(字)を口部の兄(字)に訂し「口でいうことは尽きない」といい「乃」を用いて「いくつか問題はありますがそれでもつまりは」と苦し紛れはあっても、段氏古音説では無理や破綻は見えない。「口」へのこだわりに思える。本来の固有の字義(本義)が異なっても用法上同じような義に用いられる文字群ができることの根拠に段氏の假借説が活用される。これらでは自信自得の説によって比較的無理なく論じられる。音通(字音)が見かけ(字形)を越えて結びつのが𠄎とはいえよう。一つの𠄎のその後にある1字1字がそれぞれ他の文字と結びつき、結びついた先で更に他との関連が生じて多様な運用を見せることが、多くの例から論じられている。ある文字が本義を離れて他と結びついて用いられる例の文字は、今日われわれが所謂助詞と呼ぶ類が多いことに気づく。段氏の凡例𠄎の執筆上の工

夫が功を奏す。助詞は多様であるが、凡例で説く種類は基本であることはいうまでもないと自然と知らせる。以上は、説文体例を踏まえた執筆であることは明らかである。特に部首で意味（伝えたいこと）の大まかなカテゴリーが分かり、出来上がった字でその詳細な意味・モジが伝えたい意図が分かるモジで内包する意味の精粗がモジ構造の2段階によって表される。段注書^①を考究するには、カタチとその用法に関する六書説と必ず備わる三属性（形・音・義）の音と義の双方を考慮せねばならないことは明らかとなり段氏の六書説の成果をばこそ以て論じられたのであるといえよう。

2-2-2. 追加した「𠄎」の2例（No. 20~21）

8番目𠄎（白部つまり鼻部、^②𠄎也）の段注で5𠄎（詮𠄎）、14矣（語已𠄎）、15𠄎（兄𠄎）、16𠄎（驚𠄎）、13余（𠄎之必然）・11曾（𠄎之舒）を繰り返し上げ、𠄎（兄𠄎）と𠄎（驚𠄎）の間に新たに20𠄎（曰部 出氣𠄎）→21各（口部、異𠄎）順で加えた2例を考察対象とする。

20. 5上28b 𠄎（𠄎）

⊖出氣𠄎（気が出る意の𠄎）である。⊖曰に从い、𠄎（勿）は象気が出る形に象る。⊖『春秋（左氏）傳』（隱公3年）に「鄭大子𠄎（*鄭公子忽為質於周。説文注引春秋傳曰、鄭大子𠄎。案𠄎與忽古今字論語仲・忽漢書古今人表作仲𠄎（鄭の公子忽は為に周に於いて質となった。：説文は注で「春秋傳曰鄭大子𠄎」を引く。案えるに𠄎と忽とは古今字で、『論語』「仲忽」は『漢書』「古今人表」では仲𠄎に作る）」という。

⊖『玉篇』（白部）は𠄎に作る。「出氣」とは、其の意である。𠄎とは、其の言である。「意内言外」はこれを𠄎と謂う（意味である）。此と心部忽（呼骨切。十五部）とは音は同じだが義が異なる。忽は「忘也（忘れる）」で、若えば（前漢・揚雄）「羽獵賦」（文選卷11）の「𠄎忽如神（素早いことは神のようだ）」、後漢・傅毅の「舞賦（文選卷17）」の「雲轉飄𠄎（雲は一轉して急に出没する）」、樊敏碑（後漢・巴郡太守であった樊敏について刻された碑文、隸釋11）の「奄𠄎滅（*藏に作る）形（散り易く形をなくす）」のような（𠄎）は皆て出氣の意だ。「倏奉之兒（電光のように疾風のさま）」（の倏奉）は本来は當然此の字を用いるべきで、当然忽忘字（の忽）に作ってはならないのである。（『漢書』「楊雄傳」

の「於時人皆𠄎之（時おり人は皆てこれをわすれる）」の場合は則り𠄎を假りて忽と爲る。（『漢書』）「古今人表」の「仲忽」は中𠄎に作る。許（慎）が鄭大子𠄎というのは、則り未だ名字が何な義どんいひに因んで取ったか識らないのである。今はといえば則り忽が行われて而して𠄎が廢れてしまった。

㊦呼骨切（コツ）。十五部。俗に𠄎に作る。

㊧『左傳』「桓公十年」を始めとして見える。今字は忽に作る。

*以下にある或体の段注は略す（『古文尚書撰異』に詳しいという）

21. 2上26 a 各（𠄎）

㊦異𠄎（異なる意をいう𠄎）である。㊦口と夂（人の脛すね）に从う（口に後から至り着く）。㊦夂ということについては、行っても而し止めることがあり、対象のことを聴かない意。

㊦𠄎とは「意内而言外」で、異が意と爲り、各が言と爲るのである。

㊦（夂は）陟侈切（チ）。

㊦5下44 b 夂部（部首）に「㊦從後至也。㊦象人兩脛後有致之者（㊦後から至るである。㊦人の兩脛の後に致る者がいるさまに象る）」という。致れば止める、義が相い反しても而し相いに成る（完成する）のである。古洛切（カク）。五部。

2例では説文の体例に従った配列とは言い難いが、意を口に出す𠄎（凡例そのもの）を疑問の𠄎と改めた𠄎（疑問）の注で𠄎（兄𠄎・益す）後を受け間を割るようにして加えられた20𠄎（気を出す意の𠄎）と21各（異𠄎・おのおの）でも双方「意内而言外」というのは意図であろう。注は「忽ではない」→「致れば止める、義が相い反しても而し相いに完成するのである」で終わり、遅れてもおのおのが意を口にすることでむしろ相互に補完する、止揚することは忘れるな（口に出すことが正しいことをわすれるな）だろうか。「意内而言外」或いは而が無く一気に連動し直通する「意内言外」は、心に手順を既に決した「言」とさせる「意」ならば、口にすることが大事であり、22驚く意の𠄎の連続へ続くとするのが段氏自身の意であると憶測にすぎるか。13余（きっとそうなる）→11（舒びゆく）で終る。筆者はここで益し加えた段氏の個人的な意図に、あれこれ一人憶いながらも、

分らぬまま強い興味を抱くのみではある。

3. おわりに

意を言にすることで𠄎（文字）となることをできるだけ集めてしめすべきとして配された17例は、読者に先ず何より理解を求めるために周到に書かれた。典型的な一つの𠄎はそのことのみには用いられない（専用）ことは、特徴的ではあるが、配列順を追えば関連する世界が広がり理解の幅を広げている。ある𠄎の段注はそのみで完ると同時に他の𠄎と広範に繋がるのが繰り返される。これは段注一書での執筆態度の基本で概して周到である。所謂その意図は解かる者にのみわかるように記するのが当時の学問風潮で、その中に生きた段氏の真骨頂であるからだ。結局は必要十分のわずかな17例で段氏が言及しなかった𠄎は更に多く、編集上の意図などについては典型的ではないもの、残されたかもしれない例外的な𠄎もあると思われる。本稿で、詳細が論じ切れただとは言えまいが、段氏𠄎の基本資料として頼りに他の𠄎も合わせ総合的に検討できる出発点にたどり着いたとは言えよう。段氏に説文研究を譲った同門王念孫に『廣雅疏證』、その子引之に『經傳釋詞』の専著がある。今後は凡例以外の説文（説解）の𠄎、更には段注で段氏自身が語助とみなす文字についてさらに掘り下げて論じる予定である。

さて、段注は生涯をかけて親しい人々の支援と励ましによって死の直前に刊行した畢生の大著である。9,353字の中から構成要素の司と言を合わせ生れ出る𠄎を選び、なぜ欠など口から語気を伴い音として発することを意味する部首や寧ろ特異な意味を持つ特異な𠄎を取り上げるか、訝った。ここに、段氏が何かを残そうとしたとは考えられないか、その意図が凡例での例の挙げ方にあるのではないか、この点に独特の執筆態度が認められぬものか、ということの本稿では提起した。文学を志したが選び取り研究に邁進した説文、段注こそが専著であろう。工具書の字書のどこに紛れるように記されたか、目に留まるか留まらないか、他人は興味を持つか持たぬか、それはどうでもよかったのではないかとさえ感じた。あれこれいいつつ「言うか言うまいか悩む」「書くのではなく口に出す」を繰り返す。口に出さず（或いは親しい人々に出しても）書いて残した意は何か、言を司つ

て書いて畢った意はあろう、と筆者は受け取った。

段玉裁は文（字）を創ってはいない。しかし、遑った説文について生涯をかけ本義を表わし古音を保つ本字に整えて真面目の復原を目ざして文字の研究に孜々として励んだことは疑えない⁷⁾。

人のココロを論じるのは学問的には避けるべきだが、人の内側に目を向け、それに向き合うことはあってもよいのではないか。清朝考証学という学問態度にあっては可能な限り証拠を集め科学的な精神により実証的に論じることを何より重んじる。段氏はその学風を貫く一流の大家として今なお高く評価される。段玉裁の方法論、学問的基本態度はこの時代の精髓を為し必要十分と考える証拠の選択、とり挙げ方、行論は一書を通じて尽くされているといえよう。しかしそこに込められる意は自由でその人らしくあってよいのではないか。その意を見つめることは寧ろ一代の専門家と僂される著者への敬意である、と本論筆者は読み進むにつれ考えた。

〔付記〕 本稿は、もと2016年6月4日開催の國學院大學中國學會第59回大会にて「ココロをカタチに一段注の助詞を例に一」と題した発表を中心に、2020年10月25日の同學會第63回大会での発表「再び「𠄎」について一段注に散見する例を中心に一」の一部をふまえまとめたものである。

注)

段注は、原則的に紙幅の都合で原文は略し、行論の都合上段氏記載順に通し番号を付け、全て訳出する。多々煩瑣の感を免れないかと恐れるが、段氏の「𠄎」に対する考えは段注一書に本稿の例以外散見する。総合的に考察すべきである以上、今後のためにも基本資料は遺漏なく晒しておく。但し、或体の段注は関連が認められない場合は省略する。

表記の凡例は、通し番号、記載された段注の葉、親字は楷書と小篆、⊖・⊕…は説解、その段注は改行後に同じ⊖・⊕…以下に訳出する。訳中の(A)、(B)などは「𠄎」中の位置。

底本は經韻樓原刊本『説文解字注』（上海古籍出版社 1981年初刷）。訳者の注相当*は、多くは段注引用説の出典と思われるもの（段説を多く採る十三經注疏阮元本、藝文印書館印行）などと段注の表現が異なる場合に示し、注)においても同じ。また、音韻上の基礎情報は本文中に組込み、論述や理論上大きな矛盾や破綻がないと判断した場合は特に執筆者の案語としての注は付さない。

1) 𠄎^①意内而言外也。𠄎^②从司言 (A)

①有是意於内、因有是言於外謂之𠄎。此語爲全書之凡例。全書有言意者、如𠄎言意、𠄎無腸意、𠄎悲意、𠄎然臆意之類是也。(D)有言𠄎者、如𠄎詮𠄎也、𠄎別事𠄎也、𠄎俱𠄎也、𠄎𠄎也、𠄎魯純𠄎也、𠄎智識𠄎也、𠄎曾𠄎之舒也、𠄎乃𠄎之難也、𠄎尔𠄎之必然也、𠄎矣語已𠄎也、𠄎弼兄𠄎也、𠄎𠄎驚𠄎也、𠄎𠄎𠄎惡驚𠄎也、𠄎𠄎𠄎鬼警𠄎也、𠄎泉衆與𠄎也之類是也。(E)意即意内、𠄎即言外。言意而𠄎見、言𠄎而意見。意者、文字之義也。言者、文字之聲也。𠄎者、文字形聲之合也。凡許之說字義皆意内也。凡許之說形、說聲皆言外也。有義而後有聲、有聲而後有形、造字之本也。形在而聲在焉、形聲在而義在焉、六藝之學也。𠄎與辛部之辭其義迥別。辭者、說也。从𠄎辛。𠄎辛猶理辜、謂文辭足以排難解紛也。然則辭謂篇章也。𠄎者、意内而言外。此謂摹繪物狀及發聲助語之文字也。(B)積文字而爲篇章、積𠄎而爲辭。孟子曰「不以文害辭、不以𠄎害辭也」。孔子曰「言以足志」、𠄎之謂也。「文以足言」、辭之謂也。大行人故書汁命。鄭司農云「𠄎當爲辭」、此二篆之不可混一也。

②司者、主也。意主於内而言發於外、故从司言。陸機賦曰「辭呈材以效伎、意司契而爲匠」。此字上司下言者、内外之意也。郭忠恕佩觿曰「詞朗之字是謂𠄎行、本作𠄎𠄎」。李文仲字鑿曰「詞朗崩秋字、說文作𠄎𠄎𠄎𠄎」。是可證古本不作詞、今各本篆作詞。誤也。似茲切。一部。(C)

司は后(繼體之君也)の直後9上29bにある。

司司 ①臣司事於外者(臣は外に於いて事を司(掌握し処理する)る者だ)。②从反后(后を反転した形に従う)。③凡司之屬皆从司(凡そ司の屬は皆て司に従う)。

④外より君に對して言う。君は内に在るのである。臣は宣しく四方に力^{つと}めるには外に在てであるべきであるから、故に后を反転した形に従うのだ。

(『詩』)「鄭風(羔裘)」「邦之司直」で傳は「司は、主である」という。凡そ其の事を主とすれば必ず伺察し後を恐れる。故に古は別けて伺字は無く、司はほかでもなく即り伺^{うかがう}字だ。見部に「𠄎、司也」、「𠄎、司人也」といい、人部俛に「伏、司也。俛司望也。」といい、頁部に「𠄎、司人也」といい、𠄎部(犬臣犬)に「𠄎、司也」といい、彡の下(説解)に「欲有所司殺」といい、皆て即り今の伺字だ。「周禮」「師氏(司王朝)」、「媒氏(司男女之)の「禁殺戮之(殺戮することを禁ずる)」では注して皆に「司は猶うと察のようである。俗にさらに又視に作る。凡そ其の事を司する者は皆て有司^{きみ}ということを得る(できる)」という。

⑤惟だ后^{きみ}を反すだけで(相對するの)乃ちやと后に郷^{きみ}うことになるのである。息茲切(シと発音)。一部。

2) 13下15a凡 ①取摺^{つまみまよめ}而言也(取摺^{つまみまよめ}てそうしていうのである)の段注は、①取摺とは、^{まとめ あつ}總て聚めそうしてこれを^{たばね}繋束るのである。「意内言外曰𠄎」であるから、其の意が取摺で、其の言が凡である。

『春秋𦉳露』(深察名號)に「號凡而略。名目而詳。目者、徧辨其事也。凡者、獨舉其大也。享鬼神者號、一曰祭。祭之散名。春日祠、夏日禘、秋日嘗、冬日丞。獵禽獸者號、一曰田。田之散名。春苗、秋蒐、冬狩(號は凡くて略で、名は目したもので詳しい。目とは、徧ねく其の事がらを辨けるのである。…)」という。…

…凡^{ゲン}の言たる(その音義を一語で表現すれば)は汎^{ハン}(あふれひろがる)である。汎濫一切のことを包んで擧げる稱である。…

途中に『春秋𦉳露』を引き「おおまか」であることを否定し、自説は「あふれ広がることを包含して挙げる」と説く。つまり、凡例とは汎例で、説文一書中で該当するものに広範にあてはまる約束事であるのみならず、できるだけ集めてしめすべきものと段氏はする。𠄎で編集上の目的や方針がつぶさに示されていると考えねばならない。

3) 15篇

・上1b …黄帝史官倉頡、見鳥獸蹄迹之跡、知分理之可相別異也、初造書契。…倉頡之初作書也、蓋依類象形、故謂之文。其後形聲相益、即謂之字。文者、物象之本、字者、言孳乳而寢多也。

・下1b 此十四篇五百四十部。九千三百五十三文、重文一千一百六十三、解説凡十三萬三千四百四十一字。其建首也、立一爲崑、方以類聚、物以羣分、同牽條屬、共理相貫、雜而不越。據形系𦉳、引而申之、以究萬原、畢終於亥、知化窮冥(其の首(部首)を建ててにあっては、立一を立て^{はじめ}崑と為し、方は類^{なま}をば以て聚め、物(万物)は羣^{あつまり}をば以て分け、條^{すじ}を(ひとつに)同じくして牽^{つな}ぎ屬^{つら}ね、理を共有して相^{すじ}いに貫^{たが}ねあい、雜^{まざ}るが而し(この決まりを)越えず、形に據り系𦉳し、引いて而して申し、(それで)以って^{おおくみなもと}萬の原を究め、畢に亥にて終わり、知化窮冥(復た始にかえる)である。

しばしば説文のある部首内の文字配列では基本となる意味のカテゴリー部首以下は意味の関連で配される。同義或いは近似のグループでまとまりその区切り目がわかるように配されたりする。例えば、ほぼ全篇構成要素が木の6上1a 部首木、五味の酸性に因り2番目橘から柑橘類や酸味がある果が実る樹木類が杏まで、以降桃から栗類、多彩な樹木と字義に関する形容などと続き、字体の関連で東部、林部の森で終わり切れ目を明示し、一字の文(単体)才(艸木の初め)部で6篇上は終わる。また、部首欠以降は出氣に関する意味の文字から続いて28b 歃(神が気を食す)で終わると、飲(すする)部、次(涎)部まで「飲み込む」主体がつづく、27a 兕(息ができないでつまる)部で終わる。

4) 8下18b 欠𠂔

㊦張口气悟也(口を張るように不自然なほど大きく開ければ気が悟る)。㊧象气从儿上出之形(気が儿の上から出る形に象る)。㊨凡欠之屬皆从欠(凡そ欠の屬は皆て欠に従う)。

㊦悟は「覺也(覚める)」である。引伸して解^{ときちらばる}散意と爲る。口部嚏の下(説解)に「悟解气也(悟めて気を解く)」という。鄭(玄)は『周易』(解卦)「草木皆甲宅(*十三經阮元本「百花草木皆甲塚(百花草木は甲を皆塚く)」)に注して「皆讀如人倦解之解(皆は「人が倦んだら解く」の解のように讀む)」という。「人が倦んだら解く」は、所謂「張口气悟」である。謂これを欠と謂い、同様に亦た嚏と謂う。(『周禮』)「曲禮」「君子欠伸」で正義は「志(積極的なきもち)が疲れその場合は則ぐに欠する。體が疲れた場合は則ぐに伸^{のび}をする。(『一切経音義』二に引く)『通俗文』に「口を張るように大きく開け氣を運^{めぐ}らせるのは欠故と謂う」という。按えるに『詩』(邶風・終風)「寤言則寔(寤ろうとしても寢れず、)願^ねっておもいをめぐらせば寔^{はなひ})」では(鄭玄が)傳で「寔は劫である」といい(晉)は同じ。(梁の)崔靈恩は『集注』で「毛享は寔を訓んで故と爲る。今俗に人が欠欠故^{おほ}故^{きょ}というのが是れである。劫字には作らない。人は體が倦んだ場合には則ぐに伸びをし、志が倦んだ場合には則ぐに故^{わたくし}する」という。玉裁は、許慎が説くには多く毛享を宗ぶから許が嚏を釋して「悟解气」と爲るのは、蓋ん毛説を用いたらだろうと謂う。故は音は邱據切(キョ)。欠故は古くは此語があったが、今は俗に呵欠という。さらに又た欠するということについては、気が足りないからである。故に引伸して欠少^{たりない}(十分でないの意)の字と爲る。

㊧(小篆の上部)𠂔と𠂔とは同じ。李陽冰は改めて篆體を𠂔に作る。乃り是^{まさ}に古文の𠂔(である)耳^{ただ}である。上部は人が口を開けるのに象り、下部は気が出るのに象るとするのは、非^{たたくない}である。去劒切(ケン)。八部。

段氏が注の根拠とする例中で、「解卦」は阮元本十三經と異なり「甲塚」「曲禮」の「欠故」の故は説文(欠部)になく、「終風」では説文にはあるが、寔は「礙^{また}げて行かせない。陟利切(チ)。古音は11部に在る」、劫は「人が去っていきたいのに力で目^{おしとど}って脅止めることは劫という。居怯切(キョ)。8部」で、そもそも字体が異なるので意があわない。さらに『通俗文』や崔靈恩などの説を引用する書からさらに引いてでも説く次第には苦勞のほどを想い、適切な例がない場合に屢々取るような今人や段氏当時の俗語を引いてまで欠の意義を丁寧^{まじ}に説くと思われる。欠の「意」は段氏にとって疎かにはできないものと思われ、欠部の字を先ず「意」の例で $\frac{3}{4}$ 選択する意義が認められると考える。

あくびにせよくしゃみにせよ、ありきたりの日常の行為で俗である。行為が異なれば日本語は異なりそれぞれの解釈が国語辞典には示されるわけだが、「口を異常に大きく開ける、深呼吸や塞がったものを通じさせる」動作は同じで、その意義は気分を変えすっきりと覚ますことであろう。まさに欠の「意」そのものである。「人前で大きな口を開けてアクビはいけない(噛み殺す)」「くしゃみをする時は手を口に当てて(遠慮がちに)」などとわが国での幼児期の躰の習慣からは、「張口」の欠1字が異なる日本語になり大いなるスキリにやや遠慮がある点からは解り難いことではあろう。

*ここはわからないことが多く特に以下はご教示をいただければ幸いである。

・鄭玄の『周易注』は今佚。輯佚して『鄭氏周易注 附補遺』を「叢書集成初篇」は収める。段氏古音16部説では4下48 a 解は佳買切あるいは戸賣切で16部、4上15 b 皆は古諧切で15部なので、「讀如」は問題ない。

・孫毓の『毛詩異同評』?は未見。『段注攷正』には「『毛詩集注』が引く『釋文』の引く」とある崔靈恩(『集注』の文)はわからない。

5) 6者は敍でも別事書と説かれる。多用されるだけでなく文字の用法として重要と考えるのであろう。15篇上六書説(モジの構造と用法についての総合的概念)の前、2b「箸於竹帛謂之書(竹帛に箸(あらわす)からこれを書と謂う(書という意味である))」の段注に「箸各本作者、今正。从竹。此字古祇作者。者者、別事詞也。別之則其事昭焯、故曰者明(箸は(大小徐)各本は著に作るが今正す。竹に従う。此の字は古くは祇者に作った。者ということについては、「別事詞」である。別ければその場合は則り其の(別けられた)事が昭焯であるから、故に者というのは明かだ)」と自信をもって説き、3a音義説で説く「書者如也(書ということについては如(～ノウウダ)である)でも「謂如其事物之状也。聿部曰書者「者也」、謂昭其事。云「如也」謂每一字皆如其物状(其の事物の状の如うだと謂う(意味)ことである。聿部で書とは「者也」というのは其の事を昭らかにすることを謂う(意味だ)。「如也」というのは一字(説文の親字、ここでは特に所謂文)毎に皆て其の物の状のようだと謂うこと(意味する)である)」という。本稿で論じる書も敍の初めて許慎の文意に直接かかわらないながら繰り返し説くほどの字で、者字を凡例で先ず挙げる意図を十分に察することができよう。具体的な意味(字義)はない者自体より、寧ろこの言葉を発せざるを得ない「意」こそ、口に出すものが最も伝達したいことであると知るべきと先ず教えるか。

6) 書が辭となっていたものを改める、あるいは改めないが異義を唱える場合がある。この参照として書にある辛部(14下23 a)の辭についての段注をあげる。

書と辛部(14下23 a)の辭は、其義が迥別る。辭とは、「説也。从𠄎辛。𠄎辛猶

理辜(説くである。𠄎と辛に従う(辛(おおきなつみ)を𠄎める。𠄎辛は猶理辜(みちすじだてておさめる)のようだ)だから、文と辭は足に(それらで)以て難を排除し紛乱を解くことを満足させることを謂う(いみである)。然であればそのときは則り辭は篇章(文章や作品)を謂うのである(いみである)。

『孟子』に「不以文害辭。不以𠄎害辭也(文をばもって辭を害わない。𠄎をば以て辭を害わない)と曰うのである。孔子(『論語』)が「言以足志(志(きもちやねがい)が十分満ちることのために言(くち)に言(こと)する)と)曰うのは、𠄎の謂(いみ)であり、「文以足言(文はそれで以て言うことを足す)」とは辭の謂である。

(『周禮』)「大行人」の「故書𠄎命」で鄭司農は「𠄎は當然辭に爲るべきだ」と云うが、此の二篆が扞(おなじ)ませて一字にしては不可(いけな)いのだ。

7) 先師はこう書いておられる。「思うに、自力で文字を發明した民族においては、その神話は記録さるべくもなかったのではないだろうか。けだし、神話時代には文字はなく、文字ある時代には既に神話は失われていたであろうからである。確に、迅雷風烈には聖人も變じたであろうが、しかしそれは、雷神・風神の單純なる怒りを恐れたわけではあるまい。文字を發明する精神は、自然の変化につけても、或いは君を思い或いは民を憂えるような、高度の精神でなければならぬ。ただここに、神話信仰の段階にありながら、既成の文字を習得する機會のあるもののみが、神話を記録しえたであろう。」(「楚辭」東京大学中国文学研究室編『中国の名著』所収 勁草書房 1964年 初版は1961年 * 段注では屢々「楚詞」とされる)

主要参考文献

- ・劉盼遂『段玉裁先生年譜』(段玉裁遺書所収)・陳師鴻森「段玉裁年譜訂補」(『中央研究院歷史語言研究所集刊』60-3、1989年)・馮桂芬『説文解字段注攷正』(台聯國風出版社・中文出版社 中華民國63年)・十三經注疏(阮元本)(藝文印書館印刷行)・龍宇純『韻鏡校注』(芸文印書館 1960年)・大宋重修廣韻・宋本廣韻データ(漢字データベースプロジェクト)
- ・頼惟勤『説文入門』(大修館書店 1983年)・近藤光男『清朝考証学の研究』(研文出版 平成7年)・吉田純『清朝考証学の群像』(創文社 2006年)

[キーワード] 説文解字、部首、体例、段玉裁、𠄎